

「人間力を高めることこそが、教師としての成長の近道」

藤平 敦¹⁾

「学校教育は教師が子供を育てることである」・・・この文章の意味に間違いはない。しかし、正確には、「教師は子供が自分で育つように働きかけること」であろう。このことは家庭教育でも同様であり、どちらも目指すべきゴールは子供の社会的自立である。そうであるならば、「大人が子供を社会で自立できるようにする」のではなく、「大人は子供が自ら社会で自立できるように支援する」が正しく、ここにキャリア教育のエッセンスが詰まっているのではないか。

教員養成に携わっている私たち教職センターの仕事も「教職センターのスタッフは、学生が正規の教員として採用され、子供や保護者から信頼される教師にしてあげること」ではなく、「教職センターのスタッフは、学生が自ら勉強をして採用され、子供や保護者から信頼される教師になれるように支援をすること」が正しいことであろう。

ところで、「教育は人なり」という言葉があるように、教育の成否は指導者によると言っても過言ではない。動物行動学の権威でノーベル賞を受賞したオーストラリアのローレンツ博士が「人間というものは、第一に自分の好きな人、第二に尊敬を抱いている人からのみ、文化や伝統を受け継ぐことができるようにプログラミングされている」と述べている。この言葉からも、教師には子供から「好きで、尊敬される」という2つの要素が求められる。

参考までに、私が平成31年3月まで勤務をしていた文部科学省国立教育政策研究所で主担当として行った「生徒指導の機能向上のための調査研究」の全国調査結果によると、問題が起こりやす

い学校（学級）と起こりにくい学校（学級）では、明らかに教師の意識と行動に差が見られていた。具体的には、教師の意識が子供を主体にして働きかけをしている学校（学級）は、教師と子供の関係も良好で問題が起こりにくく、教師の意識が子供よりも自分自身を主体にして行動をしている学校（学級）は、子供たちが教師に反発をするなどと、問題が起こりやすいという傾向が見られていた。例えば、教科の専門知識が優れていたとしても、「子供は二の次である」という意識で行動をしている教師が受け持つ学級は、問題が起こりやすいということだろう。子供を主体にする活動は、まさしく、改訂された学習指導要領のポイントと合致することである。

もちろん、教師にとって教科の専門性が低いことは問題ではある。しかし、まず第一に、人として成長することこそが、教師としての成長の近道であると考ええる。人間としての土台がしっかりとっていないと、いくら表面的なスキルを身に付けたとしても子供たちや保護者から受け入れてもらえないかも知れない。一見遠回りなようでも「人間力」（ここでは、IQなど数値化される知識（認知能力）では測れない非認知能力の意味で使う）を高めることが、教師としての成長の近道になると考える。AI時代に突入しても、教師には人としての在り方が求められるはずである。

中央教育審議会『教職生活の全体を通じた教育の資質能力の総合的な向上方策について（答申）』では、「教員になる前の教育は大学、教員になった後の研修は教育委員会という、断絶した役割分担から脱却し、教育委員会と大学との連携・協働

1) 副センター長

により教職生活全体を一体的な改革, 学び続ける教員を支援する仕組みを構築する必要がある」と提言している。ただし, この提言が必ずしも全国各地で広く具現化されているとは限らない。

前身が高等師範科である日本大学文理学部の教職センターが, これまで以上に地域や教育委員会

等と連携しつつ, 教職課程の段階から学生が自ら人間力を高められるように微力ではあるが, 教職センターの一員として学生の支援に努めていく所存であることを述べて, 着任の御挨拶とさせていただきます。